

保育における絵本の読み聞かせの要点

浅野 泰昌

Yasumasa ASANO

キーワード：絵本、読み聞かせ、感情の共有、保育の専門性

1. はじめに

絵本は、子どもに最初にもたらされる本であり、彼らの学びや育ちに欠かせないものとして捉えられている。洗練された絵と言葉が綴られた絵本は小さな「美術館」のようであり、展開や物語を通して感銘を与える小さな「劇場」のようでもある。また、単純で簡潔な描写でありながら、物事の本質を描き出す「哲学書」のように深い示唆を与えるものもある。絵本は子どもの身近にありながら、音楽や絵画、舞台などと同様に、芸術のひとつとして考えることもできるだろう。福音館書店の創業に参画し、日本における絵本の出版を牽引する児童文学作家松居直（2002）は、絵本を「子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読んでやる本」と捉え、その第一の意義を「親と子が共に居て、そのひとときの時間と空間の中に、絵本という遊びの言葉の世界があり、読み手と聴き手とがその言葉の遊びをわかちあい、共有すること」と述べている¹⁾。これは、子どもと親（大人）の双方が、共に居る実感を感じ合い、相互に育ち合う営みをもたらす橋渡しとしての絵本の価値を示すものである。絵本の読み聞かせにおいては、読み手と聴き手が時間と空間を共にし、その内容を共有するだけでなく、絵本から喚起される感情を共有することが重要であると考えられる。

子どもの育ちと学びの場として、家庭の他に、保育所、幼稚園、認定こども園などが挙げられる。これら保育現場における読み聞かせの様相は、家庭のものと異なる場合が多い。家庭においては、保護者と子どもの「一対一」の関係性の中で絵本が享受されることが多いのに対して、保育現場においては、園生活の流れの一部分として、保育者と複数の子どもの「一対多」の関係性の中で絵本の読み聞かせが展開される。家庭においても保育現場においても、松居が指摘する「絵本を媒介とした読み手と聴き手の時空間と感情の共有」は共通して重要である。ただし、保育の営みの中で展開される読み聞かせには、特有の配慮や表現が必要であり、その実践には保育者としての専門性が求められる。本稿は、保育者養成における絵本の読み聞かせの指導の要点を明確にするものである。特に、感情の共有を促すための表現の方法に焦点をあてる。

2. 保育における絵本の位置づけと読み聞かせの方法

保育における絵本の位置づけについて把握するために、「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」から「絵本」という単語を抽出すると、保育内容の領域「言葉」に関連する箇所から見出される²⁾³⁾。

表1. 「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」における絵本に関わる表記

	幼稚園教育要領	保育所保育指針
ねらい	(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。	③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育士等や友達と心を通わせる。
内容	(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。	⑩絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。

また、「幼稚園教育要領」においては、保育内容の領域「言葉」の内容の取扱いについて、「(3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージを持ち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」と示されている。いずれにしても、子どもが絵本を通して、楽しみながら、保育者や友達と心を通わせることをねらいとして設けていることがわかる。このことから、前述した「絵本を媒介とした読み手と聴き手の時空間と感情の共有」は、保育においても重要なものであると言えるだろう。絵本を介して、保育者と子どもが、楽しさを味わいながら感情を共有し、心を通わせるためには、どのような絵本の読み聞かせを行えばよいのだろうか。

読み聞かせの方法に唯一の正解はなく、多様なやり方が考えられる。例えば、感情表現をせずに淡々と読む方法があれば、感情移入を促すように劇的に読む方法も考えられるだろう。この場合、どちらか一方だけに定めるものではなく、時と場合、状況、前後の保育の流れ、読み聞かせのねらい、保育者の願いなどで、様々な表現を選択することが大切と考えられる。保育者や友達との生活を通して様々な経験を積み重ねている3歳児と、就学を控えた卒園間近の5歳児とでは、同じ絵本の読み聞かせであっても、環境構成、導入、表現、声かけなどの様々な観点でその方法は異なる。また、同じ年齢の子どもに読む場合でも、ねらいに応じて、その様相は異なるであろう。幅広い選択肢の中から、日常的な関わりから得た子ども理解を基に、ねらいや保育の流れに応じた適宜適切な読み聞かせを行う力量が求められる。

以上のように保育者は、絵本の読み聞かせの多様な実践方法を専門性として備える必要があり、保育者を志す学生は、ボランティアや実習などで読み聞かせの実態を学びながら、その知識や技術を習得し、実演を通して実践力を高める必要がある。さらにその過程で、絵本の喜びを感じる子どもの姿に触れ、絵本やその読み聞かせに対する理念を醸成することが極めて大切である。私たち大人にとっても、思い出深い絵本や、絵本を通じた他者とのふれあいの記憶があるように、乳幼児期の絵本の読み聞かせの体験は、人格の土台に深く根付くものである。子どもと絵本の出逢いをもたらす保育者の役割の重さを肝に銘じ、その実践の技術や知識と、それを下支えする理念を培うことが重要である。

3. 絵本の種類と子どもの発達過程

絵本の種類と、その分類には諸説があって定説はない。絵本の表現は多種多様であり、それらを明快に分類するのは困難である。物語性があるものとそうでないもの、物語の中でも伝統的な昔話をもとにしたものと新たに創作されたもの、文字が表記されるものとそうでないもの、描写が絵のものとその他のものなど、出版の対象を月齢・年齢別に分けているものなど、様々な観点で分類することができる。例えば、保育現場で活用される絵本の種類として、次のような項目が挙げられる。

物語絵本（昔話絵本、民話絵本、創作絵本）、乳児向け絵本、知識絵本、科学絵本、命名絵本、生活絵本、乳児向け絵本、文字なし絵本、写真絵本、仕掛け絵本、言葉遊び絵本、詩の絵本、擬音・擬態語の絵本 など

保育者は、多様な種類の絵本の中から、子どもの発達過程や、保育の流れ、読み聞かせのねらいなどに応じて、時と場合と状況に応じた絵本を適切に選び出すことが求められる。

その際には、子どもの発達過程を考慮する。乳児においては、絵本は他者との関わりでの媒介であり、本でありながら遊具の側面も持つ。描かれている身近な事物や、めぐりによって移り変わる変化を、他者（保護者・保育者）との応答的なやりとりと同時に楽しむ。発達が進むにつれて、短い物語も楽しむことができるようになるが、子ども自身の生活体験に根ざした作品を導入して選ぶと良い。自らの生活の中で経験する物事や、その際に感じた自らの感情を基にして、子どもは絵本に描かれる物語を共感的に楽しむようになる。

以上のような絵本の分類や発達過程に応じた選書については、専門書が数多く出版されている。ま

た、近年ではインターネット上にも、年齢や状況などの条件を入力することで適した絵本を調べることができる検索サイトも見受けられる。これらの情報は、読み聞かせの対象となる子どもの発達過程に応じた絵本を選ぶための参考となる。ただし、これらは指標のひとつとして捉え、あくまでも、子どもの実態に応じることが大切である。

4. 絵本の読み聞かせの要点

本節では、保育現場における一対多の絵本の読み聞かせの要点について、環境構成、導入、視覚的な表現要素、聴覚的な表現要素の4点から考察する。

(1) 環境構成

どのような絵本の読み聞かせにおいても、子どもが心地よく楽しみ、深く味わうことができる環境を整えることが大切である。室内環境として、室温や明るさに注意する。にぎやかな活動音にあふれている保育現場で無音の環境を用意することは難しいが、読み聞かせのねらいに応じて、出来るだけ静穏な環境を整える。

読み聞かせにおける保育者や子どもの配置にも留意する。絵本の背景が、外の景色が目についたり逆光でまぶしかったりする窓や、華美に装飾された壁面でないように保育者の座る位置を決める。子どもが広く座ると、左右の端の子どもが絵本の画面が見えにくい場合がある。過度に密集しない程度に集めて座るように促す。子どもの目線が自然に絵本に集中するように、部屋の隅を背にして行うのも良い。この際、床に座るのか、敷物を敷くのか、幼児用椅子に座るのかなど、絵本の長さや内容も考慮し、心地よく楽しめるように配慮する。また、読まれる絵本の高さにも留意する。絵本を見上げる仰角が大きくなり過ぎないように、立つ・脚の高い椅子に座る・脚の低い椅子に座る・床に直接座るなど、保育者が提示する絵本の高さに気をつける。

(2) 導入

日常的な関わりの中で構築された信頼関係があってなおも適切な導入を行って、子どもの絵本への興味と関心を高める。絵本の紹介をしながら、その内容を想起させ、読み聞かせのねらいが達成できるような言葉がけをする。例えば、ドングリの絵本を読む前に、ドングリそのものを提示するなど、絵本に描かれる事物を直接提示することも、子どもたちの興味を強く喚起し、現実の生活と絵本を結びつける方法として考えられる。「どんぐりころちゃん」のわらべうたや、「どんぐりころころ」のペープサートなども、子どもの視覚と聴覚を刺激して集中を促し、絵本に対する気持ちを高めるだろう。このように、具体物や、視覚・聴覚に働きかける児童文化財を活用することも重要である。

(3) 読み聞かせ表現における視覚的要素

① 持ち方・支え方

視覚的要素の第一は、描写された絵を活かすことである。安定した提示を行いたい。上下左右に絵本の画面が傾くのを出来るだけ押さえる。また、文章を読むのに気が行くあまり、絵本の画面が読み手側に傾くことがある。子どもにとって最も見やすい画面になるように留意する。そのために、絵本を適切に持ち、支える。一般的には、絵本の中央を下から支え、読み手の身体の横に絵本を提示する。文章を読むのに専念しすぎると、絵本ばかりに目をやることになる。読み聞かせは朗読ではなく、子どもの方に発信する表現の営みである。読み手の顔や目線が向けられることで、聴き手である子どもは、読み聞かせを受けている実感を新たにすだろう。信頼を感じる保育者が自分たちに絵本を読んでもくれる喜びを子どもたちは感じるができる。また、読み手の視線を子どもから絵本に移すことで、それに引きつけられるように子どもたちの視線も絵本に導くこともできる。

②めくり方

視覚的要素の第二は、絵が連続的に綴られたものである絵本の特質を活かす「めくり」である。紙芝居における「引き出し」と同様に、読み聞かせ表現の本質的な要素と言えるだろう。優れた絵本は、めくりの特性が物語や展開に組み込まれている。読み聞かせにおいては、それを踏まえて、めくりのタイミングや方法に留意する。ここで、めくりの際には、どうしても手が画面を横切ることがある。この時、絵を観る子どもの集中を損なわないように、出来るだけ画面を遮らないように配慮する。

③読み手の表情など

読み聞かせの視覚的で最も大切なのは、絵とめくりである。描かれた物語の場面の情景や登場人物の感情を表現し共感を促す読み聞かせにおいて、読み手の表情は、言葉による表現を補完するものである。ただし表情を過剰に付けると、絵への集中がそがれることも考えられるため、適切な範囲で、自然な表情を伴わせることを心がける。

その他、画面における要点を指し示して、子どもの集中を高め、面白さを引き出す「指さし」などを適宜取り入れる。

(4) 読み聞かせ表現における聴覚的要素

①日本語による表現

読み聞かせの聴覚的要素の最も重要なものは、言葉自体の美しさを表現することである。保育の人的環境であり、子どものモデルである保育者は、日本語を日常的に正しく、美しく使うことが求められる。読み聞かせにおいても同様である。標準語だけでなく、地域の風土や文化に根ざす方言も大切にしたい。また、昔話絵本などで描かれる昔言葉を伝えることも、自国の文化と伝統を継承することに繋がるであろう。

②抑揚・緩急強弱・リズム・間

絵本を媒介として、読み手と聴き手の感情の共有を促す時、言葉による感情表現は最も重要な要素である。地の文で語られる場面の情景や、登場人物の感情などが感じられるように、過剰でない範囲で言語表現を工夫する。その際には、音声の調子や高低、声量の大小、言葉のスピードに留意する。また日本語独自の語調や、擬音・擬態語による表現など、言葉のリズム感も大切にしたい。

音楽に意図的な無音が込められていたり、楽譜に休符が記されるのと同じように、言葉による表現にも間を意識することも、表現をより際立たせたり、子どもの集中を引き出すことにつながる。絵本によっては言葉がなく、絵のみの見開きもある。無音の中で示される絵から、場の情感を感じ取る時間的な余裕を与えたい。

③息づかい

登場人物の感情を表現する方法として有効なのが息づかいによる表現である。私たちは、感情が変わると生理的な変化が起こり、それに伴って息づかいが変わり、声音にも変化が現れる。嬉しい時には身も心も軽く感じ、息づかいも弾む。悲しい時には、身体にも力なく、重く沈んだ息づかいとなる。怒りを感じる時には、身体は力み、息づかいも荒いものとなる。感情に対応する息づかいに言葉に乗せることで、音声による感情表現は一層際立つ。そのためには、日常的に、自分や周囲の人々の内面を考慮し、それがどのような形で表出・表現されているかを関連づけて学ぶことが大切である。生き活きとした豊かで多様な感情に彩られた生活こそが、表現の源である。

子どもだけでなく私たちは、日常的に周囲の他者の感情を感じ取り、推しはかりながら集団生活を営んでいる。他者の感情の表出や表現に対する感覚は、社会的な存在である私たち人間にとって必要不可欠な能力である。保育者は、子どもやその保護者などの内面に対して、鋭敏な感性を持ち、心情を察し、適切な支援を行う必要がある。感情表現を学んだり、実践するということは、自分や周囲の他者の内面を推しはかったり、それがどのように表出・表現されているかを観察・考察することと結びつく。絵本の読み聞かせや劇などの表現力だけでなく、保育の中で関わる多様な人々の心の機微や綾を感じ取る実践力の育成にもつながる。

以上の要点を踏まえ、表現を組み合わせることで、「絵本を媒介とした読み手と聴き手の時空間と感情の共有」をもたらす絵本の読み聞かせが展開される。読み手と聴き手が共有できる感情を喚起させる情景と人物描写を描き出す表現を行うことで、子どもたちが楽しみながら、他者と感情を通じ合わせ、心を通わせる絵本の読み聞かせが実現されると考えられる。

引用・参考文献

- (1) 松井直：『絵本のよろこび』，日本放送出版協会，2002年。
- (2) 文部科学省：『幼稚園教育要領』，フレーベル館，2008年。
- (3) 厚生労働省：『保育所保育指針』，フレーベル館，2008年。

